

博士論文（要約）

論文題目：堀田善衛の敗戦後文学論-「中国」表象と戦後日本

氏名：陳童君

【目次】

| | |
|--|----|
| 凡例 | 4 |
| 序章 堀田善衛研究序説 | 5 |
| 第一部 本論 | |
| 第一章 堀田善衛・戦中から戦後へ――初期文芸評論からのアプローチ | 15 |
| 第一節 問題提起 | 15 |
| 第二節 初期評論「ラムボオ」と小林秀雄の位相 | 16 |
| 第三節 詩人の手紙と堀辰雄へのまなざし | 18 |
| 第四節 後期評論「西行」の文体と主題 | 20 |
| 第五節 草稿「西行一旅」における堀田善衛の〈戦中〉と〈戦後〉 | 24 |
| 第二章 上海・一九四五―堀田善衛『祖国喪失』論 | 30 |
| 第一節 問題提起 | 30 |
| 第二節 「祖国喪失者」の位相 | 32 |
| 第三節 「馬斯南路」と上海の都市空間 | 33 |
| 第四節 「上海っ子」の雑種性 | 35 |
| 第五節 上海知識人の二重性 | 36 |
| 第六節 「越境」と「彷徨」とのあいだ | 37 |
| 第七節 二つの「八月一五日」 | 40 |
| 第八節 魯迅の「眼」と処女作『祖国喪失』の射程 | 42 |
| 第三章 「留用」日本人の〈まなざし〉――堀田善衛『歯車』の生成とその問題意識 | |

| | | |
|-----|----------------------|----|
| 第一節 | 問題提起…………… | 48 |
| 第二節 | 堀田善衛の「留用」体験…………… | 50 |
| 第三節 | 草稿「天と地のあひだ」の問題性…………… | 52 |
| 第四節 | 茅盾『腐蝕』の受容…………… | 54 |
| 第五節 | 『齒車』の二重構造…………… | 56 |
| 第六節 | 「留用」日本人の〈まなざし〉…………… | 59 |

第四章

『広場の孤独』の表現手法——堀田善衛における朝鮮戦争と「国民文学」

| | | |
|-----|----------------------------|----|
| 第一節 | 芥川賞受賞作『広場の孤独』の問題性…………… | 65 |
| 第二節 | 「事件」としての朝鮮戦争…………… | 66 |
| 第三節 | 「遍歴」される占領下の日本…………… | 68 |
| 第四節 | 日本「国民」と「祖国喪失者」とのあいだ…………… | 70 |
| 第五節 | コミュニストとの対決のなかで…………… | 73 |
| 第六節 | 限界としての〈空白〉と方法としての「孤独」…………… | 75 |

第五章

堀田善衛『漢奸』の問いかけ——戦後文学における「対日協力者」の表象

| | | |
|-----|----------------------|----|
| 第一節 | 「漢奸」へのまなざし…………… | 81 |
| 第二節 | 翻弄される「対日協力者」…………… | 83 |
| 第三節 | 中国人日本留学生の二重性…………… | 85 |
| 第四節 | 占領者と協力者とのあいだに…………… | 88 |
| 第五節 | 堀田善衛『漢奸』からの問いかけ…………… | 92 |

第六章

〈他者〉としての中国語——堀田善衛『断層』の材源と方法……………

| | | |
|-----|-------------------|-----|
| 第一節 | 中国語へのまなざし…………… | 98 |
| 第二節 | 草稿「断層」の問題性…………… | 100 |
| 第三節 | 中国体験の再生産のなかで…………… | 102 |

| | |
|----------------------------------|-----|
| 初出一覧 | 240 |
| 資料篇 (四) 堀田善衛座談会・鼎談・対談・インタビュー総覧 | 231 |
| 資料篇 (三) 堀田善衛研究文献総覧 | 190 |
| 資料篇 (二) 堀田善衛「希望について」全文紹介 | 187 |
| 資料篇 (一) 堀田善衛上海体験重要事項注解 | 142 |
| 第二部 資料篇 | |
| 結章 堀田善衛の敗戦後文学論――「戦後十年」と「中国」の行方 | 132 |
| 第五節 「上海シリーズ」最終篇の射程 | 127 |
| 第四節 〈虚無な眼〉と〈他者の眼〉 | 124 |
| 第三節 「多元描写」の技法とマルロオ『人間の条件』 | 121 |
| 第二節 「経済小説」の方法と矛盾『子夜』の受容 | 118 |
| 第一節 『歴史』へのアプローチ | 116 |
| 第七章 堀田善衛『歴史』論――「上海シリーズ」最終篇の方法と射程 | 116 |
| 第六節 『旅愁』を語る堀田善衛『断層』の射程 | 111 |
| 第五節 『在日本獄中』を読むこと | 108 |
| 第四節 中国文学研究者の異質性 | 105 |

【本文】

博士論文の全部は単行本の形で刊行されたために全文公表ができない。

単行本の書誌情報：

陳童君著『堀田善衛の敗戦後文学論―「中国」表象と戦後日本』（鼎書房、

二〇一七年一〇月）

isbn: 978-4-907282-36-3

【参考文献】

- 黒田大河「堀田善衛と上海——『祖国喪失』と『無国籍』のあいだで」（『日本近代文学』第八一集、二〇〇九年一月）
- 紅野謙介「解説 〈路上の人〉の作法」（『天上大風同時代評セレクション一九八六一一九九八』、筑摩書房二〇〇九年二月）
- アヌシュリー（学位論文）「藤原新也作『印度放浪』に見られる作家のインドイメージ…堀田善衛作『インドで考えたこと』を参照しつつ」（大阪大学、二〇一〇年）
- 堀田百合子「十三冊のパスポート」（『ちくま』、二〇一〇年一月）
- 北日本放送本部報道制作局報道制作部「水平線と羅針盤…堀田善衛のメッセージ」（KNB新春スペシャル 放送日…二〇一〇年一月二日）
- 山本成子「堀田善衛展 寄稿連載」（『読売新聞』、二〇一〇年一月二日～二九日）（※富山版掲載のもの、所蔵先不明、書誌情報は「ヨミダス歴史館」によった）
- 丸山珪一「堀田善衛と『ふるさと』問題」（『富山文学の会ふるさと文学を語るシンポジウム報告書 第一回』所収、二〇一〇年三月）
- 伊藤博「堀田善衛と日野啓三——『眼の虚無』から『虚点の精神』へ」（『法政大学大学院紀要』第六五号、二〇一〇年一〇月）
- 高橋源一郎「解説『ゴヤⅠ』」（『集英社文庫』、二〇一〇年一月）
- 鹿島茂「解説『ゴヤⅡ』」（『集英社文庫』、二〇一〇年二月）
- 紅野謙介「堀田を通してゴヤが現れ、ゴヤを通してスペインが現れる」（『青春と読書』、二〇一〇年一二月）
- 匿名『『ゴヤ スペイン光と影』堀田善衛著』（『読売新聞』、二〇一〇年二月五日）
- 城戸真亜子「解説『ゴヤⅢ』」（『集英社文庫』、二〇一一年一月）
- 紅野謙介「解説『ゴヤⅣ』」（『集英社文庫』、二〇一一年二月）
- 今井真理「未発表 堀田善衛宛て遠藤周作書簡・葉書」（『三田文学』、二〇一一年二月）
- 米倉巖「研究ノートから 堀田善衛『方丈記私記』を読む」（『藝文攷』第一六号、日本大学大学院芸術学研究科編、二〇一一年二月）
- 八柏龍紀「堀田善衛著『ゴヤ』」（『金曜日』、二〇一一年三月四日）
- 田口麻奈「芥川龍之介『神神の微笑』と日本文化論——戦後作家による再評価を起点とし

て」(「東京大学国文学論集」第六号、二〇一一年四月)

陣野俊史「アナロジーとファンタジー 堀田善衛『方丈記私記』と『広場の孤独』について」(『作家と戦争…太平洋戦争70年』所収、河出書房新社、二〇一一年六月)

小島四郎「堀田善衛著『広場の孤独』」(リプレーザ」第四号、二〇一一年七月)

土倉ヒロ子「堀田善衛著『広場の孤独』小論」(「群系」第二十七号、二〇一一年七月)

田中純「歴史の無気味さ 堀田善衛『方丈記私記』」(「現代思想」、二〇一一年七月臨時増刊号)

陳童君「『祖国喪失』と堀田善衛の〈上海・1945〉——『国際都市』における『裏切り者』の逃亡と越境」(「日本学研究」第二二号、北京日本学研究センター編、二〇一一年一月)

辺見庸「わたしの死者——主体と内省」(『瓦礫の中から言葉を——わたしの〈死者〉へ』所収、NHK出版二〇一二年一月)

丸山珪一「堀田文学の北陸モティーフ」(「富山文学の会ふるさと文学を語るシンポジウム報告書 第三回」所収、二〇一二年二月)

辺見庸「人間存在の根源的な無責任さ」について——災禍と言葉と失声」(佐藤泰正編『時代を問う文学』所収、笠間書院、二〇一二年三月)

唐戸民雄「『方丈記』と近代文学」(『新視点徹底追跡 方丈記と鴨長明』所収、勉誠出版二〇一二年八月)

曾嶸(学位論文)「堀田善衛と中国…『上海体験』に始まる初期作品の形成と展開」(大阪大学、二〇一二年九月)

無署名「先人を訪ねて 堀田善衛 望楼から見つめた世界」(「読売新聞」、二〇一二年九月二二日)

丸山珪一「堀田善衛の詩『故里』…『死の影』のもとで」(「富山文学の会ふるさと文学を語るシンポジウム報告書 第四回」所収、二〇一三年三月)

荻野恭一「伏木・堀田文学散歩に参加して」、所収同右。

曾嶸「堀田善衛と『上海体験』…『身分転換』でめざめた日中関係への思考」(「阪大比較文学」第七号、二〇一三年三月)

堀江敏幸「若き詩人による、たった一度だけの炒飯 堀田善衛『上海日記 滬上天下一九五』集英社 鼠と炒飯」(「Dancyu」、二〇一三年五月)

陳童君「『留用』日本人の〈まなざし〉——堀田善衛『歯車』の生成とその問題意識」(「國語と國文學」、二〇一三年六月)

宮崎駿「時代が僕に追いついた」（『日本経済新聞』、二〇一三年七月二七日）

無署名「歴史、人間の行為 不可逆性の怖ろしさ 『上海にて』堀田善衛著」（『Verdad』、二〇一三年一〇月）

丸山珪一「創刊にあたって」（『海龍』、『堀田善衛の会』通信」第一号、二〇一三年一二月）

野村剛「伏木町本町38番地報告記1」、同右。

竹内栄美子「堀田善衛研究の広がり」、同右。

渡邊一民「武田泰淳と堀田善衛——戦争からの出発」『講座 東アジアの知識人第五巻——さまざまな戦後日本敗戦50年代』所収、有志社二〇一四年四月）

山本讓司「最後の読書 死を初めて感じたあの日へ」（『週刊朝日』、二〇一四年五月二三日）

水溜真由美「堀田善衛『審判』論…原爆投下の罪と裁き」（北海道大学文学研究科紀要」第一四三号、二〇一四年七月）

稲沢潤子「堀田善衛『祖国喪失』における民衆の発見」（『民主文学』、二〇一四年八月）

彦坂諦「中国とどう出会ったか？——堀田善衛『時間』、武田泰淳『風媒花』（『文学をとおして戦争と人間を考える』所収、れんが書房新社、二〇一四年一〇月）

水溜真由美「堀田善衛とアジア・アフリカ作家会議（1）…第三世界との出会い」（北海道大学文学研究科紀要」第一四四号、二〇一四年一月）

陳童君「戦後文学における『対日協力者』の表象——堀田善衛『漢奸』を中心に」（『國語と國文學』、二〇一五年一月）

辺見庸「連載評論 1★9★3★7・『時間』はなぜ消されたのか」（『週刊金曜日』、二〇一五年一月三日〜七月三一日）

細川涼一「東宝特撮映画『モスラ』と中村真一郎・福永武彦・堀田善衛『発光妖精とモスラ』（『京都橘大学研究紀要』二〇一四年度、刊行は二〇一五年二月）

陳童君「〈他者〉としての中国語——堀田善衛『断層』の材源と方法」（『東京大学国文学論集』第一〇号、二〇一五年三月）

西田桐子「堀田善衛『曇り日』と文芸誌の『戦後十年』言説…1955年における文学者の責任」（『言語態』二〇一四年度、発行は二〇一五年三月）

山下宏明「堀田善衛の『家』と文学…『酔漢』を読む」（『名古屋大学文学部研究論集』第六号、二〇一五年三月）

金彦鎬「戦争と人間の欲望を告発したかった——逗子のご自宅で堀田善衛先生と交わした話」（『本でつくるユートピア』所収、北沢図書出版、二〇一五年四月）

陳童君 『『広場の孤独』の表現手法——堀田善衛における朝鮮戦争と『国民文学』（『日本近代文学』第九二集、二〇一五年五月）

辺見庸 「解説『時間』」、岩波現代文庫、二〇一五年一月。

笠森勇 「絶望的嘆息ということ…犀星・堀田善衛・中野重治」（『室生犀星研究』、二〇一五年一月）。

水溜真由美 「堀田善衛とアジア・アフリカ作家会議（2）…『政治と文学』（『北海道大文学研究科紀要』、二〇一五年十二月）。

丸川浩 「堀田善衛『国なき人々』の難民たち…堀田善衛の上海体験」（『山陽女子短期大学紀要』三七号、二〇一六年）

秦剛 「南京の記憶と日本近現代文学——芥川龍之介、石川達三、堀田善衛が描いた『南京』（『芥川龍之介研究』第一〇号、二〇一六年）

陳童君 「堀田善衛の戦中文学論——『ラムボオに就いて』と『西行』をめぐって」（『國語と國文學』、二〇一六年二月）。

【論文の内容の要旨】

本稿は、堀田善衛文学の基礎研究を目指すものである。堀田が敗戦後に執筆した一連の「上海もの」を主な研究対象とし、作品の評釈を通して堀田善衛の「上海体験」および彼の敗戦後文学の内実を把握することが本稿の目的である。それと同時に、堀田善衛の「上海もの」を切り口に、戦後日本における「中国」の文学表象を考察することも重要な目的とした。論文の副題を「『中国』表象と戦後日本」としたのはそのためである。

第一章「堀田善衛・戦中から戦後へ」では、戦時下堀田の文学的営為を検討する。昭和の小説家として知られる堀田善衛は実際に敗戦まで小説作品を発表したことがない。戦前の堀田は主に批評家として文筆活動を行っており、彼の戦中文学の諸作もほとんど文芸評論のテキストから構成されている。しかしこれまでの堀田善衛研究の力点は彼の戦後文学に置かれていたために、堀田の戦中のテキストについては、まだ十分に検討されていない。本章は、全集未収録作の「ラムボオ」と未発表草稿「西行―旅」を主な材料とし、堀田文学における〈戦中〉と〈戦後〉とのつながりを明らかにした。

第二章「『祖国喪失』論」では、堀田善衛の処女作である連作小説『祖国喪失』を検討する。『祖国喪失』は堀田善衛が戦後に発表した最初の小説である。この小説の特色の一つは、作品の内部に一九四五年上海の「都市空間」を構築している点にある。この手法は、一九二五年の上海を描いた横光利一の長編『上海』ともよく似ている。ただし『上海』の、あくまでも虚構に依存した、「生なましい体験そのものよりも、言葉がつくりだす世界」（前田愛）とは異なり、『祖国喪失』では、物語世界に生起する一連の出来事がほとんど書き手の実体験によっており、作中人物の動きにそって現れた街や通りも実世界の固有名詞をそのまま用いている。こうした虚構と現実が交錯する上海の言説空間に「祖国喪失者」がどのように表象されているのかを検討しながら、処女作『祖国喪失』の全体像と、堀田善衛の上海での敗戦体験の意味を解明した。

第三章「『歯車』論」では、堀田善衛の上海での「留用」体験の文学表現を検討する。一九五一年五月に、堀田善衛は雑誌「文学51」の創刊号に『歯車』を発表する。原稿一四〇枚の中編小説は、伊能という日本人主人公の視点から、戦時下・戦後の上海で政治のメカニズムに翻弄される中国人青年の姿を描いている。『歯車』の発表当時、日本ではゲオルギウの『二十五時』、オーウェルの『一九八四』、ケストラの『真晝の暗黒』な

ど欧米現代作家の政治小説が大量に翻訳され、既に下火になりつつあった「政治と文学」の論争が再び文壇の中心的話題となっていた。こうした風潮のなかで、『歯車』は日本の政治小説の秀作として文壇の注目を集め、新人作家の堀田善衛を華々しく世に送り出すことに成功したのだが、しかし一方で、政治小説としての成功は、同時にこの作品に対する評価の限界をも表している。たとえば、『歯車』がほかの政治小説と異なる点は「留用」日本人の視点で描かれているところに求められるのだが、同時代を含むこれまでの論者はほとんどこれを問題視せず、そのため『歯車』の特質を全体的に把握するには至っていないのである。こうした先行研究の欠落は、堀田の留用生活の全貌が未だに解明されていないことに一因があり、また『歯車』に対する基礎的研究の不足とも関係している。本章は、『歯車』の基礎研究もかねて、戦後文学における「留用」日本人の表象について考察する。まず、作者堀田善衛の留用生活を各種の資料や関係者の証言によって把握し、そのうえで、作品『歯車』の生成過程及びその問題意識を明らかにした。

第四章「『広場の孤独』論」では、堀田善衛の文壇的出世作『広場の孤独』について検討する。周知のように、堀田善衛は「日米安保条約」が調印された一九五一年九月に朝鮮戦争をテーマとして『広場の孤独』を「中央公論」に発表し、同作をもって当年度下半期の芥川賞を受賞した。しかし一方で、その同月に彼が雑誌「文学51」に「国際情勢」というエッセイをも発表していることは、これまであまり注目されていない。この短いエッセイは当時堀田の創作理念を代弁するものとして、同時期に書かれた『広場の孤独』の表現手法を探るうえで不可欠なものである。ここで、「文学が国民の運命に真剣に相渉つてゆべきものである」という「国民文学」への志向を表明した堀田は、その方法として「現実の意味と深くかかはる事件」を「己れの創作のシステム中に収斂」することを挙げている。この方法を模索するために『広場の孤独』が執筆されたことが容易に推察されるわけである。また、この作品が発表当初から当年度の「最大の問題作」として位置づけられた最も大きな理由は、朝鮮戦争のような国際的・政治的「事件」を文学の世界に映しだし、それによって堀田自身の「国民文学」の方法を実現させたからであると思われる。本章は、作者の未発表の創作ノートやその他の各種の関連資料によって『広場の孤独』の表現手法とその問題意識を把握し、そのうえで、堀田善衛における「国民文学論」の行方を探ってみた。

第五章「『漢奸』論」では、同じ芥川賞受賞作の『漢奸』を検討する。いわゆる「漢奸」とは、中国語においては民族の裏切り者に対する最大級の非難用語である。かつての日中

戦争の文脈において、この言葉は特に日本側に協力した中国人、すなわち「対日協力者」を指していた。一九四五年に日本が敗戦を迎えた後、中国では大規模な「漢奸」狩りが行われ、多くの「対日協力者」は「漢奸罪」に問われていた。このような「対日協力者」の運命について、堀田善衛は戦後の文筆活動において機会あるごとに言及し、その問題を追究しているが、そのなかでも特にこの問題を真正面から問いかけているのが、「文学界」一九五一年九月号に発表した中編小説の『漢奸』である。発表当時、この作品は概して好評を博し、堀田が同時期に発表した『広場の孤独』と共に第二六回芥川賞の受賞対象になっていたのだが、『広場の孤独』の研究は早くも五〇年代から始まっていたのに対して、同じ芥川賞受賞作の『漢奸』を対象とする周到な考察は、未だにほとんど存在していないのである。一方で、こうした「対日協力者」のテーマに関しては戦後文学者の多くが関心を寄せており、同時代に「対日協力者」の作品群も現れていた。しかし堀田善衛の『漢奸』と同様、これらの作品の大半は未だに未検討のままで、その言説空間を全体的に捉えるための調査もほとんど進展が見られていない。本章は、堀田善衛の『漢奸』を座標軸として、戦後文学における「対日協力者」の表象に関して一考察を試みた。まず、作品『漢奸』のテキスト分析を行い、それから、同作と時代背景や問題意識などを共有する阿部知二と武田泰淳の作品とを比較したうえで、同時代の「対日協力者」作品群の特質及びその作品群における堀田善衛『漢奸』の位相を確認した。

第六章「『断層』論」では、堀田文学における「中国語」の表象を検討する。堀田善衛が一九五二年に中国語の〈不在〉をテーマとして短編小説『断層』を発表したことは、彼の戦後の文学的人生において一つの転換点をなしているといえる。雑誌「改造」一九五二年二月号に掲載されたこの作品は、敗戦前後の上海に二年近く滞在した主人公の安野が、中国語を学ぼうとしながらも次々にその機を失っていく経緯が描かれている。それまで〈他者〉としての中国語を自作の言説空間から意識的に排除していた堀田善衛は、『断層』の執筆に至り、ようやく中国語の〈不在〉を真正面から問うことになる。一方で、『断層』以降、堀田は「上海シリーズ」の最終篇として長編『歴史』（新潮社、一九五三年）を書きつづけていたが、この作品では中国語はすでに〈不在〉から〈顕在化〉へと変わり、主人公の言表手段の一つとして位置づけられている。その意味でも〈他者〉としての中国語は、『断層』の成立によってはじめて堀田善衛の文学世界に市民権を獲得したと考えることができるし、『断層』が堀田の戦後文学を解読するために不可欠な作品である理由もそ

の点にこそあると思われるのである。本章では、作品『断層』の材源と方法を検討しながら、戦後文学における「中国語」の表象形式について一考察を試みた。

第七章「『歴史』論」では、堀田善衛の「上海シリーズ」最終篇の『歴史』を検討する。敗戦後、一連の「上海もの」を書きつづけていた堀田善衛は、一九五二年から一九五三年にかけて彼の「上海シリーズ」の最終篇として長編小説『歴史』を発表する。原稿用紙八百枚を費やしたこの長編小説は、中国政府に「留用」された日本人主人公の竜田をはじめ、十人以上の主要人物を同じ戦後上海の舞台に登場させ、革命前夜の中国の風景を多様な角度から描いている。この野心的な長編は、初期堀田の「上海シリーズ」のなかでも最も壮大な構成を持つ作品であるが、発表されてからすでに半世紀以上の時間が経ったものの、本格的な作品研究はほとんど進展が見られていないのが現状である。本章は、堀田の残した未発表の創作ノートの記述を参照しながら『歴史』に対して評釈を試み、そのうえで、作者の問題意識と、「上海シリーズ」最終篇としての『歴史』の射程を明らかにした。本論の結章は「堀田善衛の敗戦後文学論——『戦後十年』と『中国』の行方」とした。この章では、堀田善衛の「戦後十年」の記念作である中編小説『曇り日』を検討したうえで、堀田の敗戦後文学の内実と、堀田文学における「中国」の位相を総括した。